

総合情報

センターだより

CONTENTS

- 表紙 **錦絵新聞**
- 2 マルチメディア対応教室の新設について
- 3 存心館・アクロスウィングのマルチメディアルーム新設について
- 4 コア・データベース活用紹介 授業編
- 5 「電子図書館」の基礎知識……①
- 6・7 SHAWBACK先生に聞く **授業のIT化**
- 8 新着図書 / BKCからお知らせします

錦絵新聞

本学では非常に価値の高い貴重な資料を豊富に所蔵しています。今号では、その中から人文系文献資料室に所蔵されている錦絵新聞をご紹介します。

錦絵新聞とは明治7年から10年ごろまで多数発行された木版の多色刷り版画で、「新聞」すなわち、新しく聞き知った出来事＝ニュースを伝える文章と「錦絵」と呼ばれた浮世絵版画が合体した出版物です。この錦絵新聞における様式上の特徴は、画面全体を囲む赤または紫の枠と、題号を捧げ持つ天使像です。赤と紫は明治錦絵には特徴的な色で、開港により輸入が増加した外国染料を用いており、天使像とともに西洋を感じさせる新しい時代を鮮やかに強調しています。人物本位の絵の背景やあるいは絵とは別の囲みの中に、200～600字程度の文章が添えられ、漢字にはふりがながついているのが錦絵新聞の基本的な画面構成です。

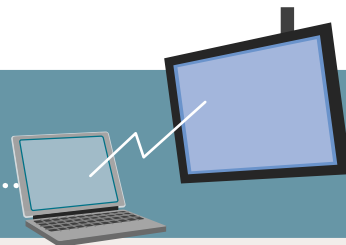
当時、欧米から輸入された文明の利器のひとつとして、「ニュースペーパー」を普及させようとするにあたり、幕末から明治初期の知識人たちは「ニュース」という新たな概念を「新しく聞き知った出来事」＝「新聞」と翻訳し、その物的形態を「新聞紙」と呼び分けました。ただしこれらは漢文漢語の読める知識人向けの文章で書かれており、読者も数千ほどに限られていました。結果としてかな文字が読める程度の庶民には新聞も新聞紙もよく分からない遠い存在であり、むしろ絵草紙屋の店頭を彩る錦絵の方が当時の庶民にはなじみのメディアとなりました。風俗



の流行をいち早く取り入れてきた錦絵の新機軸として新聞記事をもとにした絵のシリーズは試みられ、新聞とは何かを庶民に浸透させる一種の宣伝として企画されたものと考えられています。

錦絵新聞は絵草紙の名称のもとから生まれた絵本、錦絵、読売瓦版などの、近世の視覚メディアを再統合した印刷物であるといえます。迅速で定期的なニュース媒体であった錦絵新聞は浮世絵版画の継承的発展であり、色彩豊かで分かりやすい、文字の読めない者をもひきつける魅力を持った視覚的情報媒体でした。

マルチメディア対応教室 の新設について



RAINBOW第4期情報基盤整備第1フェーズとして、マルチメディア対応教室を新設しました。これらの教室では大型プラズマディスプレイの導入により、ノートパソコンを持ち込んでPowerPointでプレゼンテーションをしたり、Webページを表示するといった利用が可能となりました。これにより、紙によるレジュメとは違った表現や最新情報を反映した、臨場感あふれる講義が実現できます。また、VTRなど従来のAVコンテンツについても、以前のTVモニタより大型で迫力ある映像が映し出せます。

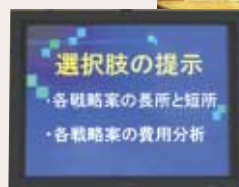
後期セメスターからご利用になれますので、是非ご利用いただきますようご案内いたします。

【全マルチメディア教室に設置】

- 37インチプラズマディスプレイ
- VTR(3倍速未対応機種場合があります)
- 持ち込みPC用ディスプレイ入力端子
- 外部入力端子(映像・音声端子)

【一部教室に設置】

- TVポインター機能
- OHC(教材提示装置)



新設マルチメディア対応教室機器一覧

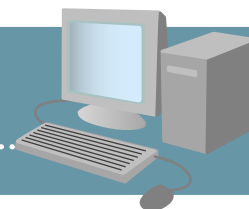
	建物名	階	教室名	収容人数	VTR	DVD/LD/CD	カセット	OHC
衣笠 キャンパス	明学館	2	93	1000				
	明学館	3	94	756				
	存心館	3	802	266				
	研心館	4	641	621				
	清心館	3	534	204				
	清心館	4	549	528				
びわこ・くさつ キャンパス	プリズムハウス	2	P201	485				
	プリズムハウス	2	P202	485				
	プリズムハウス	2	P203	485				
	フォレストハウス	2	F201	221				
	フォレストハウス	2	F202	221				
	フォレストハウス	2	F204	221				
	フォレストハウス	2	F205	221				
	コーニングハウス	2	C201	727				

Information

ネットワークをご利用の場合は、パソコンにIPアドレスの設定を行う必要があります。
(IPアドレスは教室の壁の情報コンセントにシールで表示しています。)

～お問い合わせは、衣笠 / 有心館1F(内線3747)、BKC / アクロスウイング2F(内線7255)の情報システム課まで～

存心館・アクロスウイング のマルチメディアルーム新設について……………



2001年度後期より、存心館(160台)、アクロスウイング(196台)にマルチメディアルームが新設されました。最新のパソコンが設置されていますのでご利用ください。

CD-R / CD-RWドライブ搭載

640MBの大容量

CD-RはCD-ROMとして読み出せるように設定することもできるので、ウイルスチェックのデータなどフロッピーに入りきらない大きなデータを自宅のパソコンでも利用することができる便利なメディアです。ただし、1度書き込んだデータ領域は再利用できないので、データ領域は書き捨てになり、利用可能な容量は減っていきますが、CD-Rのメディアは安く手に入る(1枚100円前後)ので、実用上それほど問題になりません。

CD-RWは、CD-Rよりメディアは少し高めです(1枚200円程度)が、何度でも書き換えができます。ただし、他のパソコンではCD-ROMとして利用できません。メディアはいずれも生協で購入することができます。



PCカードリーダー搭載

ノートパソコンとの連携に便利

各パソコンにはコンパクトフラッシュカードリーダーとTYPE II対応PCカードリーダーが搭載されています。ノートパソコンとのデータのやり取りに便利な上、コンパクトフラッシュカードは最近のPDA(Personal Digital(Data) Assistants: 携帯情報端末)でも多く採用されています。容量も32MBから64MB以上まで幅広く用意されており、用途と予算に応じて使い分けことができます。

コンパクトフラッシュカード



32MB / 生協価格3,600円程度
64MB / 生協価格5,600円程度

利用証方式導入!!

空き状況を素早く把握し、スムーズに利用していただけるように「利用証方式」を導入しました。ご協力ください。



存心館……………9:00 ~ 21:30

アクロスウイング……………9:00 ~ 18:30

*マルチメディアルーム新設に伴い、
下記のオープンルームに変更があります!

存心館オープンパソコンルーム
……………9:00 ~ 18:00

コーリング情報処理演習室9……………閉室



新設マルチメディア対応教室、新設マルチメディアルームはRAINBOWホームページにて、詳細情報を掲載しています。「立命館トップページ」「総合情報センター/図書館」「RAINBOW」をクリックしてご覧ください。

コア・データベース 活用紹介

授業編

本学経済学部教授
山井 敏章 先生



～ 経済・経営学部における朝日新聞DNAおよびRUNNERS利用課題～

1999年4月から経済・経営両学部は、朝日新聞DNA(Digital News Archives)およびRUNNERSを使用した課題を新入生に課しています。その1年前(両学部のBKC移転の年)から私は経済学部の副学部長を務めており、教育方法改善の一つとして浮かんだアイデアが上の課題です。BKCへの移転に伴い情報基盤が大幅に改善され、さまざまなデータベースも完備されてきたのですが、学生によるその利用は残念ながらあまり芳しくありませんでした。これでは宝の持ち腐れです。

また、図書館の利用それ自体についても、以前から経済学部学生の入館者数が他学部に比べて少ないといううれしくないデータをしばしば見せられました。こういう状況をなんとか改善したい、というのが私の思いでした。

ご承知のとおり朝日新聞DNAは、1984年から前日までの朝日新聞記事が検索できる便利なデータベースです。^{*1} またRUNNERSは資料検索システムで、立命館大学と立命館アジア太平洋大学で所蔵し入力された図書や雑誌をOPAC(Online Public Access Catalog: オンライン閲覧目録)で検索することができます。^{*2}

1回生基礎演習の第1回目の授業で新入生それぞれにメディアライブラリー所蔵の本を1冊ずつ指定し、



2001年度 経済学部1回生用
図書・新聞情報の検索について(課題)

RUNNERSで資料検索を行い、所在を確認したうえで本の表紙をコピーして提出する、というのが第1の課題です。第2の課題は、新入生それぞれに別々のキーワードを与え、学生はそれを含む新聞記事を朝日新聞DNAで検索し、日付と見出しをメモして提出する、というものです。^{*3}

新入生は否応なく図書館に行ってRUNNERSを使うことになり、またコピーカードを買ってコピーする仕方も覚えます。効果は歴然で、図書館利用者数は 年度当初だけでなくその後も 飛躍的に増えました。

課題の準備として、基礎演習のクラス人数分のキーワードを用意することが必要で、これは私が考えました。新入生全員分の本のタイトルリストは、メディアライブラリーの担当者と協力して作成しました。さらにメディアライブラリー3階「多目的閲覧室」では、この課題実施のために職員による「RUNNERS講習会」を開催しました。期せずして教員・職員共同の教育活動が実現しました。ちなみに課題結果の提出率は、入学直後ということもあり、ほぼ100%です。

問題は、図書館および朝日新聞DNAなどの「コア・データベース」の継続利用であり、この点ではまだ工夫が必要だと思います。ただ何より肝心なのは、これらを積極的に利用しようとする学生自身の姿勢です。大学は「知の宝庫」であり、図書館やコア・データベースはその核心を成します。これをうまく利用できるかどうか、大学での勉学の質を大きく左右します。「書を捨てよ。街に出よう。」と言った詩人がいましたが、これは書を十分読んでいることが前提です。書にどっぷりつかる時間を学生諸君が持つことを切に祈ります。

^{*1}...朝日新聞DNA(Digital News Archives)は朝日新聞社が提供する全文記事データベースです。各都道府県の地方版、「AERA」、「週刊朝日」の記事も検索対象です。詳しくは、「学術情報データベース活用ガイドブック」をご覧ください。

^{*2}...RUNNERSで蔵書検索ができるのは、1957年以降に受け入れられた資料に限ります。1957年以前に受け入れられた資料は図書館(衣笠)またはメディアライブラリーにある「カード目録」で検索します。

^{*3}...課題1 文献リスト(例) 広告の法理:紛争と法的責任、流通国際化と海外の小売業、個客識別マーケティング:小売業のONE to ONE戦略実践法、都市と社会の進化論:都市と人間の理想の関係を考える、地球の土壌劣化に立ち向かう:少しでもいい前に進みたい、など70タイトル。

課題2 キーワード(例)バブル崩壊、介護保険、IT革命、関西経済規制緩和、金融危機、グローバル化、家電リサイクル法、など40種類。

「電子図書館」 の基礎知識.....①

はじめに

昨今のインターネットやIT(Information Technology)の急速な発展には目を見はるものがあります。「情報」「IT」「ネットワーク」...毎日のようにこういった言葉を耳にしています。そうしたなかで、図書館の中でできることも大きく変化しています。

今までは、図書館で所蔵している図書や雑誌といった印刷媒体の資料を利用提供することが図書館サービスの中心でした。しかし、電子ジャーナルやデータベースのウェイトが高まるにつれ、単に情報を「見せる」だけでなく、簡単に操作できるシステムを構築し、あわせて新しい情報を迅速に「入手」し、「提供」する仕組みが生まれてきました。

書籍など伝統的な形態の資料のみを収集・提供するばかりでなく、CD-ROMやオンライン・データベース等の電子メディアを充実させ、インターネットと結合させた総合的な学術情報データベースを積極的に活用し、新しい図書館サービスを確立することが強く求められています。

そこで、今後の大学における学術情報サービスとして、「電子図書館」の可能性についてご紹介したいと思います。

電子図書館 とは

1985年頃、日本の図書館同士がネットワークで結ばれてお互いにオンライン情報検索サービスを開始しました。そして1989年の学術審議会の報告のなかで「今後は電子図書館的機能を充実させる必要がある」ことが言及され、このころから「電子図書館」という言葉が普及するようになりました。この当時考えられていた「電子図書館」は、貸出・返却や、蔵書検索のシステム化が中心でした。

1990年代に入り、光ファイバーや衛星によって世界の通信インフラが飛躍的に発達し、欧米を中心に「映像検索システム」「仮想図書館開発」などそれぞれの課題を決めて技術開発が始まりました。バージニア大学のように、大学独自で学術資料の電子化に取り組んでいるところもあります。マサチューセッツ工科大学(MIT)では、講義内容を電子化し、無料で公開しています。

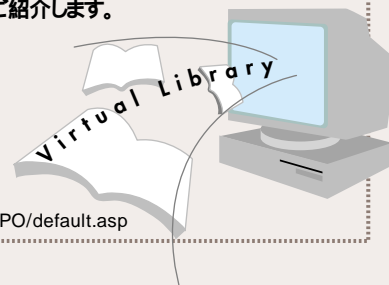
(URL <http://web.mit.edu/>)



日本が欧米で行われている電子図書館計画に参入したきっかけは、1995年にブリュッセルで開催されたG7(先進7ヶ国蔵相・中央銀行総裁会議)でした。「電子社会に関する関係閣僚会議」が設けられ、パリで開催された第1回会合で日本はフランスとともに電子図書館の構築研究に取り組むことになりました。

その後、日本でもようやくインターネットの普及やマルチメディア技術の進展によって、「図書館サービス(情報検索・閲覧・利用相談等)をネットワークにつながったパソコンから利用できる」ことが「電子図書館」の意味合いとして変化してきました。その究極が「バーチャル・ライブラリー」(Virtual Library)といわれています。「バーチャル・ライブラリー」では、建物が現実に存在するかどうかに関係なく、インターネットを経由して読書サービスや複写サービス、レファレンス・サービスなど図書館が提供しているサービスの大部分を享受することができ、世界中の人がリアルタイムで利用できる図書館といえるでしょう。

次号からは、本学の事例を含め、さらに具体的な電子図書館のサービス内容についてご紹介します。



<http://miyagawa-jp.ubiquitous-media.com/MediaDEPO/default.asp>

SHAWBACK先生に聞く 授業のIT化



本学理工学部助教授
Michael Shawback先生

プロフィール

担当科目 / 英語

専門分野 / 外国語教育

主な所属学会と役職 / 全国語学教育学会、
Teachers of English to Speakers of Other Languages (TESOL)等

研究主題 / CALL(コンピュータを利用した語学学習)
教室内における効果的なテクノロジーの利用、コンピュータを使用した
ボキャブラリーの学習などの研究。

主な著書 / A Stepping Stone for Learning Culture: The World
Wide Web in EFL Classrooms(『タイTESOL学会第19回年次国際
大会論文集』1999年)、Variability and Attention to Form: The
Relationship Between Task and Interlanguage Performance
(『経大論集』第47巻第1号、大阪経済大学、1996年)ほか多数。

先生は、主にコンピュータを利用した語学教育を担当され、教材の一環としてホームページを公開していらっしゃるんですね。ぜひ、その経緯とねらいについてご紹介いただけないでしょうか。

SHAWBACK先生

海外の大学で日本語の授業を担当していた時も、ホームページを活用していたのです。

その頃は、ホームページ上で参考文献などを紹介し、授業当日までに取り組んでおくべき課題を提供したり、小テストの採点結果等を即時公開することで学生自身によって学習成果の到達度を自己管理できる仕組みを構築していました。

つまり、学生自身が自主的に学習する「きっかけづくり」にホームページが役立った経験から、その活用をお考えになったのですね。

SHAWBACK先生

その通りです。学生にとって教員からの一方通行になりがちな授業形態を改善し、もちろん「きっかけづくり」だけでなく、双方向の学習体制を確立するためにホームページを立ち上げました。

学生のみなさんは、ホームページを活用した授業に参加して、どのような印象を抱いていますか？

SHAWBACK先生

私自身も、課題の提出率が向上するように、また学生の視点から取り組みやすい形態の学習を促すようにと時事問題のニュース等を教材にするなど工夫を凝らしています。

ホームページに対する評価について統計分析を行ったことはありませんが、学生個人の範囲にとどまらず語学クラス全体の成績が向上したことからわかるように、ホームページ活用に対する満足度は高いといえるでしょう。

これとは別に情報リテラシー教育も担当していますから、語学教育以外の分野でも評価されていることと思います。

ホームページのようにITの活用方法について、他の先生方に紹介されたいことはありますか？

SHAWBACK先生

理工学部では、語学授業を担当していらっしゃる全ての先生方に私の作ったホームページを活用していただいています。

学生同士だけでなく、私たち教壇に立つ理工学部の語学教員同士の間でも、どのようにすれば学生が授業に取り組みやすくなり、理解しやすくなるのか、さまざまな情報を共有し合う「きっかけ」にもなっています。

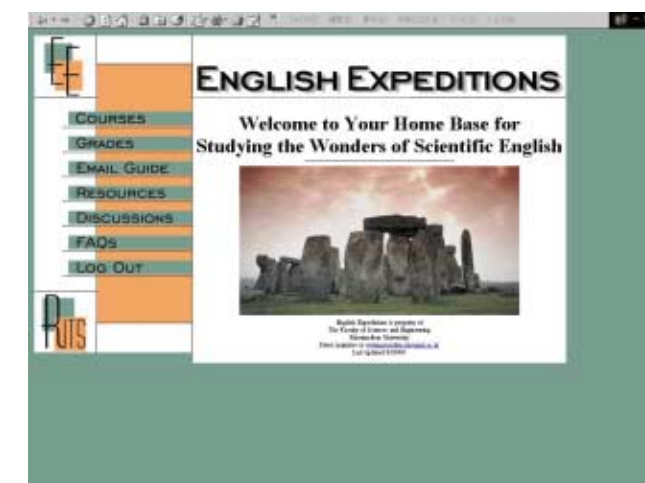
これは、本学でホームページを立ち上げた当初には、全く予期していなかったことです。

先生の身近な方々との間だけで共有するだけでなく、もっと他の方にも展開したい事例ですね。

SHAWBACK先生

確かに、これは理工学部の語学教育に限った事例にとどめず、他専攻や他学部の先生方にも知ってもらいたいと思っています。

個人的には、本学全体の取組みとして展開できればと願っております。私一人では微力で困難なところもありますので、今後は情報システム課の皆さんにお手伝いいただくことが多々あると思いますよ。



URL <http://www.ee.ritsumeai.ac.jp/>

新着図書

『Penguin Readers』

【メディアライブラリー所蔵】

「Penguin Readers」はEasystartsからLEVEL6 (ADVANCED)まで7つのグレードに分かれています。メディアライブラリーではLEVEL3からLEVEL6の中から約80タイトルを揃えました。さらに、本文を吹き込んだカセットテープも付いているので、リスニング学習にも最適です。

リスニング
学習OK!



図書館(衣笠)の新着図書については図書館ホームページをご覧ください。
図書館で新しく購入した図書の中から、毎週10冊ずつ紹介しています。

ホームページのアドレス

<http://www.ritsumei.ac.jp/www-lib/sogo/libindex.htm>

BKCからお知らせします。

『雑誌記事索引ファイル』と『Enjoy JOIS』 が利用できます!!

雑誌記事索引ファイル

2001年7月より、メディアセンター(BKC)1階情報検索コーナーに『雑誌記事索引ファイル』(Web版)検索用端末を3台新設しました。メディアライブラリーにも『雑誌記事索引』(CD-ROM版)に加えて、『雑誌記事索引ファイル』(Web版)検索用端末を3台増設しました。

『雑誌記事索引ファイル』
とは・・・?

国内で刊行された学術雑誌、大学紀要、専門誌を中心に1975年より現在までの330万件もの記事情報を収録した索引ファイルです。人文・社会、科学・技術など全分野をカバーし、2週間ごとに最新情報が追加更新されます。

Enjoy JOIS

2001年10月1日よりメディアセンター及び理工学部関連施設において、『Enjoy JOIS』が利用できるようになりました。Webブラウザで利用でき、初心者でも簡単に検索することができます。

『Enjoy JOIS』は理工学部所属の教員、学生、院生等が利用できるデータベースです。

『Enjoy JOIS』
とは・・・?

科学技術に関する文献情報などを利用者が直接データベースにアクセスして、8,000万件を越すデータの中から必要な情報の所在を探し出すサービスです。例えば、データベース「JICSTファイル」は科学技術振興事業団(JST)が編集・発行する冊子体・CD-ROMの「科学技術文献速報」に対応しています。

詳しくは、メディアセンター・メディアライブラリーの各サービスカウンターまでお尋ねください。



データベース講習会のお知らせ

衣笠・BKCの各図書館では秋からも各種データベース講習会を予定しています。詳細は館内掲示板や総合情報センターホームページの各館のページをご覧ください。

総合情報センターホームページアドレス <http://www.ritsumei.ac.jp/www-lib/>